

ヒロシマ音楽譜

作品が紡ぐ復興

⑨

被爆直後の惨状を克明に記録し、後に文学作品として昇華させた原民喜

を發揮したが、特に高く評価されているのは日本語のテキストによる音楽

林 光



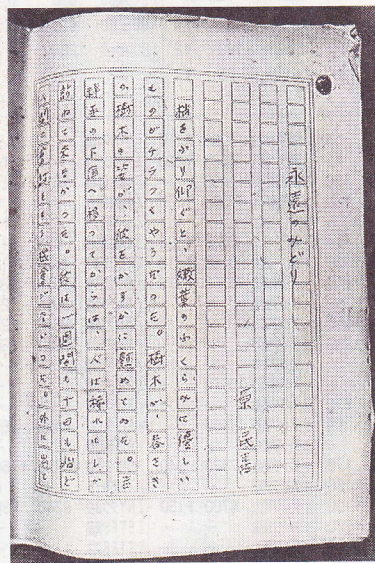
のテキストは、これまでの数多くの音楽作品の題材として取り上げられてきた。その一つ、林光(1931~2012年)の合唱曲「原爆小景」は、原のテキスト同様、記録や描写の域を越えた芸術的価値により、今後長きにわたって受け継がれるだろう。

林は交響曲から映画音楽に至るまで幅広い才能に大きく貢献した。一方で、すでに10代から

合唱曲 完結まで 43年

再生願う詩 葛藤重ねる

「水ヲ下サイ」「日ノ暮レチカク」「夜」「永遠のみどり」の4部からなる「原爆小景」は、日本語や社会に対する感性という、林の創作の二つの根幹を見事に結晶させている。テキストに表れた意味や言葉の抑揚ばかりか行間の見えない言葉さえもすくい上げ、原爆による世界の断絶を音で代弁する。



遺品として広島市へ寄贈されている原民喜「永遠のみどり」の原稿

だが単なる代弁者ではない。第3部までの完成後、林は30年もの間、終曲「永遠のみどり」を完成させられなかった。核をめぐる状況が変わらない中、ヒロシマの再生を願うこの詩に作曲は可能なのか。懐疑し続ける林自身の声が、原の描いた「原爆小景」に新たな

(原由美)